# フランス音楽と詩の楽しみ

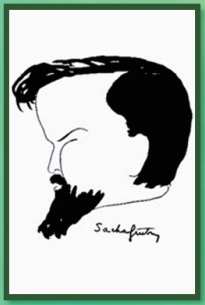
2019年5月19日（日）、明治学院大学文学部フランス文学科と言語文化研究所による共催コンサート「フランス音楽と詩の楽しみ」が、白金キャンパスのアートホールにて開催されました。明治学院大学文学部フランス文学科所属の畠山達と新潟大学人文学部人文学科所属の津森圭一が企画・運営を担当し、演奏は、平尾真伸（ヴァイオリン）、丹羽経彦（チェロ）、鈴木愛美（ソプラノ）、竹内公一（テノール）、水戸博道（ピアノ）、関田桂子（ピアノ）の六名によるコンサートとなりました。なお、ピアノの水戸博道は、明治学院大学心理学部教育発達学科教授でもあります。

ドビュッシー、フランク、ラヴェル、フォーレ、デュパルクらフランスの作曲家による歌曲などに加えて、畠山と津森からヴェルレーヌ、マラルメ、ユゴー、ボードレールの詩に関するレクチャーも行われました。フランスの詩とフランス音楽の見事なハーモニーが体験できる貴重な機会だっただけではなく、文学研究者による解説がついた大学ならではのコンサートとなりました。

当日は、120名を超える聴衆が足を運んでくださり、活況を呈したコンサートとなりました。来場してくださった皆様に心からお礼を申し上げます。そして、コンサート開催のために尽力してくれた言語文化研究所の伊東絢さん、フランス文学科共同研究室の金子聖歩さん、鈴木瞭子さん、ステージ・マネージャーを務めた大学院生の羽深由佳乃さんはじめ、惜しみない協力をしてくれた全てのスタッフ、学生、大学院生に改めて感謝の意を表します。

以下は、当日配布されたパンフレットです。フランスの香りのするコンサートの雰囲気を少しでも味わっていただければ幸いです。

# フランス音楽と詩の楽しみ



2019 年 5 月 19 日（日）14:00 開演
明治学院大学白金キャンパス　アートホール

共催

明治学院大学文学部フランス文学科
言語文化研究所

# ご挨拶

「De la musique avant tout chose 何よりも音楽を」。フランス歌曲のコンサートに行くと必ずと言ってよいほど目にするのが、ヴェルレーヌの『詩法』(1884)にあるこの一節でしょう。ところが、詩人たちが音楽からその富を奪還しようとした時期、音楽家は詩の富を利用する形で多くの歌曲を誕生させました。それだけではなく、マラルメやワーグナーなどが提唱したように、どの芸術も自らの領域を飛び出て一種の総合芸術を目指す大きな潮流があったように思えます。

このような諸芸術の混交が生まれたのは偶然ではありません。フォーレは、デュパルクが作曲した「旅へのいざない」を聴いて刺激を受け、ワーグナーの音楽を知り、ヴェルレーヌの詩と出会うことで新しい音楽を開拓しました。ドビュッシーもフォーレのピアノ演奏を聴いてインスピレーションを受けましたが、それ以前にヴェルレーヌの妻となるマチルドの母親からピアノのレッスンを受けていました。またドビュッシーは、マラルメの火曜会に行く前に、バイロイトでワーグナーの音楽に触れています。今日では必然のように思える数多くの「出会い」が有機的に繋がり、新しく素晴らしい芸術を誕生させたと言えるでしょう。

今日、明治学院大学で「フランス音楽と詩の楽しみ」というコンサートが開催できるのも偶然の「出会い」が重なった結果です。明治学院大学勤務の畠山達が、パリでの留学時代に津森圭一に出会って親交を深め、その津森圭一は、新潟大学へ着任すると、ピアノ演奏家の関田桂子と出会いました。そして関田桂子は、水戸博道が新潟大学に務めていた頃、ピアノの指導を受けていましたが、その水戸博道は現在、明治学院大学に勤めています。こうして今日、ここでコンサートを開催するための大きな輪が繋がったのです。

本日は、「フランス音楽と詩の楽しみ」にようこそお越しくださいました。皆さまにとって、今日の音楽との「出会い」が豊かなものとなり、これからますます大きな輪が広がっていくことを願っております。最後までどうぞごゆっくりお楽しみください。

令和元年 5 月 19 日
運営一同

# プログラム

## 第一部

1. ベルガマスク組曲　第 3 曲「月の光」　（Pf. 関田）
Suite bergamasque « Clair de lune »
作曲：クロード・ドビュッシー
Claude Debussy

［レクチャー：津森 圭一］

2. 「月の光」　（Sop. 鈴木，Pf. 関田）
« Clair de lune »
詩：ポール・ヴェルレーヌ　作曲：クロード・ドビュッシー
Paul Verlaine　Claude Debussy

3. 「星の夜」　（Sop. 鈴木，Pf. 関田）
« Nuit d'étoiles »
詩：テオドール・ド・バンヴィル　作曲：クロード・ドビュッシー
Théodore de Banville　Claude Debussy

4. 「幻」　（Sop. 鈴木，Pf. 関田）
« Apparition »
詩：ステファヌ・マラルメ　作曲：クロード・ドビュッシー
Stéphane Mallarmé　Claude Debussy

［レクチャー：津森 圭一］

5. ヴァイオリンソナタ　第 4 楽章　（Vn. 平尾，Pf. 関田）
Sonata Pour Piano et Violon en la majeur, 4$^{e}$ mouvement
作曲：セザール・フランク
César Franck

6. 「水の戯れ」　（Pf. 水戸）
« Jeux d'eau »
作曲：モーリス・ラヴェル
Maurice Ravel

## ― 休憩　15 分 ―

## 第二部

［レクチャー：畠山 達］

7.「五月」　（Ten. 竹内，Pf. 水戸）
« Mai »
詩：ヴィクトル・ユゴー　作曲：ガブリエル・フォーレ
Victor Hugo　Gabriel Fauré

8.「身代金」　（Ten. 竹内，Pf. 水戸）
« La Rançon »
詩：シャルル・ボードレール　作曲：ガブリエル・フォーレ
Charles Baudelaire　Gabriel Fauré

9.「前世」　（Ten. 竹内，Pf. 水戸）
« La Vie antérieure »
詩：シャルル・ボードレール　作曲：アンリ・デュパルク
Charles Baudelaire　Henri Duparc

10. 前奏曲集第 1 集　第 4 曲「音と香りは夕暮れの大気に漂う」　（Pf. 水戸）
4e Prélude (1er livre), « ... Les sons et les parfums tournent dans l'air du soir »
作曲：クロード・ドビュッシー
Claude Debussy

11. ピアノトリオ　（Vn. 平尾，Vc. 丹羽，Pf. 関田）
Trio pour piano, violon et violoncelle
作曲：ガブリエル・フォーレ
Gabriel Fauré

## 1. ベルガマスク組曲　第 3 曲「月の光」
## Suite bergamasque « Clair de lune »

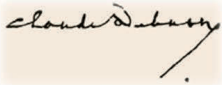
作曲：クロード・ドビュッシー
Claude Debussy

演奏：関田 桂子（ピアノ）

1890 年から 1905 年の作品。4 つの小品からなる「ベルガマスク組曲」の第 3 曲。組曲の名称はドビュッシー（1862-1918）が旅行で立ち寄った北イタリアの「ベルガモ地方」にちなんでいる。1882 年にはヴェルレーヌ（1844-1896）の詩集『艶なる宴』の「月の光」のために作曲した歌曲も書いており、このピアノ曲「月の光」もヴェルレーヌの詩「月の光」との出会いがきっかけとなっていると考えられる。

ベルガモ・アルタへの道

クロード・ドビュッシー



城壁の町　ベルガモ

## 2.「月の光」
## « Clair de lune »

詩：ポール・ヴェルレーヌ　　作曲：クロード・ドビュッシー
Paul Verlaine　　Claude Debussy

演奏：鈴木 愛美（ソプラノ）
関田 桂子（ピアノ）

1882 年の作。ヴェルレーヌの詩集『艶（えん）なる宴』（1869 年）の冒頭の詩「月の光」のために作曲した歌曲。北イタリアの町ベルガモで月明かりに照らされた森の中、男女が仮面をつけて恋に戯れる夢幻的な情景が描かれている。のちにこの歌曲「月の光」は改作され、歌曲集『艶なる宴 第 1 集』（1891 年）の中におさめられている。本日演奏するのは 1882 年のヴァージョン。

Votre âme est un paysage choisi
Que vont charmant masques et bergamasques
Jouant du luth et dansant et quasi
Tristes sous leurs déguisements fantasques.

Tout en chantant sur le mode mineur
L'amour vainqueur et la vie opportune,
Ils n'ont pas l'air de croire à leur bonheur
Et leur chanson se mêle au clair de lune,

Au calme clair de lune triste et beau,
Qui fait rêver les oiseaux dans les arbres
Et sangloter d'extase les jets d'eau,
Les grands jets d'eau sveltes parmi les marbres.

あなたの魂は洗練された風景が、
その引き立て役、マスクとベルガマスクが、
リュートを弾いたり踊ったり、でも何やら
悲しそう、その風変わりな仮装の陰では。

口をそろえて短調で歌う
愛の勝利と日和見生活、
だが幸せを信じてはいない様子、
彼らの歌は月の光に溶けてゆく、

悲しくも美しい、静かな月の光に、
鳥たちは木の間に夢見心地、
恍惚に啜り泣くのは噴水、
大理石に囲まれ細く高く噴き上げる噴水。

ポール・ヴェルレーヌ「月の光」（『ドビュッシー・ソング・ブック　対訳歌曲詩集』山田兼士訳、澪標、2013 年、97 頁

ポール・ヴェルレーヌ
（画）フレデリック・バジール

3

## 3.「星の夜」
## « Nuit d'étoiles »

詩：テオドール・ド・バンヴィル　　作曲：クロード・ドビュッシー
Théodore de Banville　　Claude Debussy

演奏：鈴木 愛美（ソプラノ）
関田 桂子（ピアノ）

1880 年に高踏派詩人テオドール・ド・バンヴィル（1823-1891）の詩「星の夜」（1846 年刊行の詩集『鍾乳石』に「ウェーバーの最後の思考」のタイトルで所収）のために作曲された。ドビュッシーの声楽曲の中では最も多い 13 曲がバンヴィルの詩によるものである。

Nuit d'étoiles,
Sous tes voiles,
Sous ta brise et tes parfums,
Triste lyre
Qui soupire,
Je rêve aux amours défunts,
Je rêve aux amours défunts.

La sereine mélancolie
Vient éclore au fond de mon cœur,
Et j'entends l'âme de ma mie
Tressaillir dans le bois rêveur.

Nuit d'étoiles,
Sous tes voiles,
Sous ta brise et tes parfums,
Triste lyre
Qui soupire,
Je rêve aux amours défunts,
Je rêve aux amours défunts.

Je revois à notre fontaine
Tes regards bleus comme les cieux ;
Cette rose, c'est ton haleine,
Et ces étoiles sont tes yeux.

星の夜には、
きみのヴェールの下、
きみのそよ風ときみの香りの下、
悲しい竪琴が
ため息ついたら、
ぼくは過ぎた恋を夢に見るのだ、
ぼくは過ぎた恋を夢に見るのだ。

透き通ったメランコリーが
やって来て心の奥に花を咲かせると、
ぼくは聴く、恋人の魂が
夢の森の中で震えているのを。

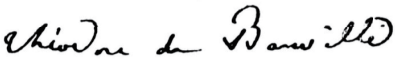
星の夜には、
きみのヴェールの下、
きみのそよ風ときみの香りの下、
悲しい竪琴が
ため息ついたら、
ぼくは過ぎた恋を夢に見るのだ、
ぼくは過ぎた恋を夢にみるのだ。

ぼくらの噴水の前でぼくは思い出す、
きみの瞳の青が空のようであることを、
このバラがきみの吐息であることを、
そしてこの星たちがきみの瞳であることを。

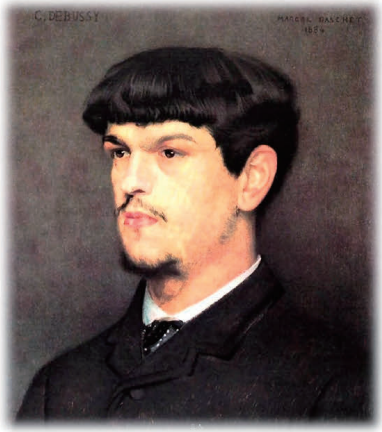
Nuit d'étoiles,
Sous tes voiles,
Sous ta brise et tes parfums,
Triste lyre
Qui soupire,
Je rêve aux amours défunts,
Je rêve aux amours défunts.

星の夜には、
きみのヴェールの下、
きみのそよ風ときみの香りの下、
悲しい竪琴が
ため息ついたら、
ぼくは過ぎた恋を夢に見るのだ、
ぼくは過ぎた恋を夢に見るのだ。

テオドール・ド・バンヴィル「ウェーバーの最後の思考」(『ドビュッシー・ソング・ブック　対訳歌曲詩集』山田兼士訳、澪標、2013 年、11-13 頁)



テオドール・ド・バンヴィル




クロード・ドビュッシー
（画）マルセル・バシェ

## 4. 「幻」
## « Apparition »

詩：ステファヌ・マラルメ　　作曲：クロード・ドビュッシー
Stéphane Mallarmé　　Claude Debussy

演奏：鈴木 愛美（ソプラノ）
関田 桂子（ピアノ）

1884 年作曲。詩人ステファヌ・マラルメ（1842-1898）の助言者でソプラノ歌手でもあるマリー・ヴァニエに捧げられた。マラルメの詩は 1863 年の作であり、友人の詩人カザリスの婚約者を謳ったものである。おりしもマラルメ自身も後の妻マリア・ゲルハルトとの恋が進行中であった。当時から難解と言われたマラルメの詩にドビュッシーは意欲的に取り組み、のちに「牧神の午後」にもメロディーを与えることになる。

La lune s'attristait. Des séraphins en pleurs
Rêvant, l'archet aux doigts, dans le calme des fleurs
Vaporeuses, tiraient de mourantes violes
De blancs sanglots glissant sur l'azur des corolles.
– C'était le jour béni de ton premier baiser.
Ma songerie aimant à me martyriser
S'enivrant savamment du parfum de tristesse
Que même sans regret et sans déboire laisse
La cueillaison d'un Rêve au cœur qui l'a cueilli.
J'errais donc, l'œil rivé sur le pavé vieilli
Quand avec du soleil aux cheveux, dans la rue
Et dans le soir, tu m'es en riant apparue
Et j'ai cru voir la fée au chapeau de clarté
Qui jadis sur mes beaux sommeils d'enfant gâté
Passait, laissant toujours de ses mains mal fermées
Neiger de blancs bouquets d'étoiles parfumées.

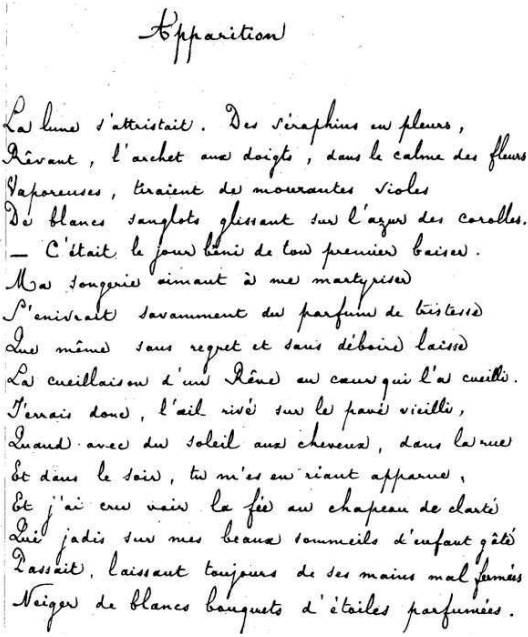
月は悲しんでいた。熾天使たちは泣きながら
夢見ながら指に弓をはさみ、おぼろげな花の静けさの中、
物憂げなヴィオルを弾いたら
白いすすり泣きが花冠の蒼穹を滑っていった。
――それはおまえが最初の接吻に祝福された日。
私の夢想は自ら苛むことを好み
哀しみの香りに賢しこくも酔っていた、
その香りは後悔もなく幻滅もないまま
一つの〈夢〉の収穫が夢を摘んだ心に残したものだ。
だから私はさまよった、古びた舗道に目をやりながら、
その時、髪に陽を浴びて、街の中、
夕暮れの中、おまえは笑いながら現われた、
私は見たと思った、光の帽子をかぶった妖精を、
かつて甘やかされた子どもの美しい眠りの中を
通り過ぎ、軽く握った手からいつも
芳しい星の白い花束を雪と降らせたあの妖精を。

ステファヌ・マラルメ「幻」（『ドビュッシー・ソング・ブック 対訳歌曲詩集』山田兼士訳、澪標、2013 年、45 頁）

4

Stéphane Mallarmé

ステファヌ・マラルメ　（画）エドゥアール・マネ



Apparition

La lune s'attristait. Des séraphins en pleurs,
Rêvant, l'archet aux doigts, dans le calme des fleurs
Vaporeuses, tiraient de mourantes violes
De blancs sanglots glissant sur l'azur des corolles.
— C'était le jour béni de ton premier baiser.
Ma tendresse aimant à nos martyres
S'enivrait savamment du parfum de tristesse
Que même sans regret et sans désir laisse
La cueillaison d'un Rêve au cœur qui l'a cueilli.
J'errais donc, l'œil rivé sur le pavé vieilli,
Quand avec du soleil aux cheveux, dans la rue
Et dans le soir, tu m'es en riant apparue,
Et j'ai cru voir la fée au chapeau de clarté
Qui jadis sur mes beaux sommeils d'enfant gâté
Passait, laissant toujours de ses mains mal fermées
Neiger de blancs bouquets d'étoiles parfumées.

Manuscrit de l'*Apparition*
マラルメ「幻」の手稿

## 5. ヴァイオリンソナタ　第 4 楽章
## Sonata Pour Piano et Violon en la majeur, 4e mouvement

作曲：セザール・フランク
César Franck

演奏：平尾 真伸（ヴァイオリン）
関田 桂子（ピアノ）

セザール・フランク（1822-1890）はベルギー出身の作曲家。パリのサント＝クロチルド教会でオルガニストとして活躍していた。「ヴァイオリンソナタ」はヴァイオリニスト、ウジェーヌ・イザイの結婚に際し、お祝いとして献呈された作品。全 4 楽章からなり、いくつかの音楽的モチーフを基にして全曲を統一する循環形式を用いた作品。第 4 楽章には、それまでの楽章に出たモチーフが次々に登場し、有機的に結合される。マルセル・プルースト（1871-1922）の小説『失われた時を求めて』（1913-1927）における「ヴァントュイユのソナタ」の重要な着想源とされている。

Marcel Proust, *À la Recherche du temps perdu*
プルースト『失われた時を求めて』

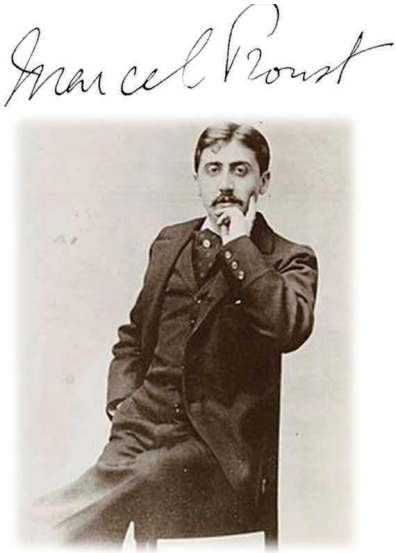
« Le beau dialogue que Swann entendit entre le piano et le violon au commencement du dernier morceau ! La suppression des mots humains, loin d'y laisser régner la fantaisie, comme on aurait pu croire, l'en avait éliminée ; jamais le langage parlé ne fut si inflexiblement nécessité, ne connut à ce point la pertinence des questions, l'évidence des réponses. D'abord le piano solitaire se plaignit, comme un oiseau abandonné de sa compagne ; le violon l'entendit, lui répondit comme d'un arbre voisin. C'était comme au commencement du monde, comme s'il n'y avait encore eu qu'eux deux sur la terre, ou plutôt dans ce monde fermé à tout le reste, construit par la logique d'un créateur et où ils ne seraient jamais que tous les deux : cette sonate. Est-ce un oiseau, est-ce l'âme incomplète encore de la petite phrase, est-ce une fée, cet être invisible et gémissant dont le piano ensuite redisait tendrement la plainte ? Ses cris étaient si soudains que le violoniste devait se précipiter sur son archet pour les recueillir. Merveilleux oiseau ! le violoniste semblait vouloir le charmer, l'apprivoiser, le capter. Déjà il avait passé dans son âme, déjà la petite phrase évoquée agitait comme celui d'un médium le corps vraiment possédé du violoniste. »

Marcel Proust, « Un amour de Swann », *Du côté de chez Swann* [1913]. *À la Recherche du temps perdu,* tome I, Paris, Gallimard, « Folio », 2000, p. 345-346.

「最後のパートの冒頭で聴いたピアノとヴァイオリンの対話の、なんと美しかったことか！　人間の言葉は排除されているが、奇抜なものが幅を利かせるどころか、すっかり影を潜めていた。人間の話す言葉がこれほど厳正な必然となりえたことはなく、これほどまでに的確な問いと明白な答えの域に達したことはなかった。まず孤独なピアノが、伴侶に見捨てられた小鳥のように不満を訴える。それをヴァイオリンが聞きつけ、隣の木からさえずるように答える。あたかもこの世のはじまりのとき、いまだ地上にはこの両者しか存在しないと言わんばかりである。地上というより、ほかの一切を排除して閉ざされた世界というべきかもしれない。創造者の理屈でつくられたこのソナタという世界では、永久に両者しか存在しないのだろう。目にみえず、うめいている存在、その嘆きをつぎつぎにピアノが優しくくり返す存在は、小鳥なのだろうか、小楽節のいまだ不完全な魂なのだろうか、妖精なのだろうか。その嘆きの声があまりにも唐突なので、ヴァイオリン奏者はあわてて弓にとびつき、それを受けとめなければならない。魔法の小鳥なのだ！　ヴァイオリン奏者は、それを呪縛し、手なずけ、捕らえようとしているように感じられる。すると小鳥はすでに弾き手の心のなかに飛びこんでいて、早くも呼び出された小楽節は、完全にとり憑かれたヴァイオリン奏者の身体をまるで霊媒の身体のように揺すっている。」

マルセル・プルースト『失われた時を求めて』第 1 篇『スワン家のほうへ』「スワンの恋」吉川一義訳、岩波文庫、361-362 頁

セザール・フランク



マルセル・プルースト

7

## 6. 「水の戯れ」
## « Jeux d'eau »

作曲：モーリス・ラヴェル
Maurice Ravel

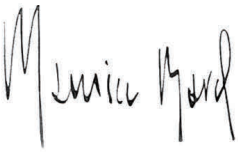
演奏：水戸 博道（ピアノ）

1901 年作曲。モーリス・ラヴェル（1875-1937）はこの歌曲を師であるガブリエル・フォーレに献呈した。楽譜の冒頭にはアンリ・ド・レニエ（1864-1936）の詩集『水の都』（1902 年）の中の「水の祝祭」から次の詩句が引用されている。

Dieu fluvial riant de l'eau qui le chatouille
水にくすぐられて笑いさざめく河の神

同時代のほかの作曲家の追随をゆるさない堅固な形式に裏付けられた華麗さを持つ作品。

モーリス・ラヴェル



アンリ・ド・レニエ

8

## 7.「五月」
## « Mai »

詩：ヴィクトル・ユゴー　　作曲：ガブリエル・フォーレ
Victor Hugo　　Gabriel Fauré

演奏：竹内 公一（テノール）
水戸 博道（ピアノ）

ヴィクトル・ユゴー（1802-1885）の 1835 年の詩集『薄明の歌』に所収の 16 行からなる無題の詩をもとに、1862 年に作曲されたと推測されている。「五月」というタイトルを付けたのは、当時まだ 17 歳であったフォーレ（1845-1924）。5 月の光輝く太陽のもと、爽やかな自然の中に身を投げ出すことを誘う明るい内容となっている。

Puisque mai tout en fleurs dans les prés nous réclame,
Viens ! ne te lasse pas de mêler à ton âme
La campagne, les bois, les ombrages charmants,
Les larges clairs de lune au bord des flots dormants,
Le sentier qui finit où le chemin commence,
Et l'air et le printemps et l'horizon immense,
L'horizon que ce monde attache humble et joyeux
Comme une lèvre au bas de la robe des cieux !
Viens ! et que le regard des pudiques étoiles
Qui tombe sur la terre à travers tant de voiles,
Que l'arbre pénétré de parfums et de chants,
Que le souffle embrasé de midi dans les champs,
Et l'ombre et le soleil et l'onde et la verdure,
Et le rayonnement de toute la nature
Fassent épanouir, comme une double fleur,
La beauté sur ton front et l'amour dans ton cœur !

花いっぱいの五月が草原で私たちを呼んでいる、
来たれ！きみの魂に倦むことなく解け合わせたまえ、
野原、森、うるわしき木陰を、
眠れる波の縁に映る皓々たる月の光を、
通りが始まるところで尽きる小径を、
そこから、空気と春、そして遥かなる地平線を、
唇のように、空の裳裾に
この世界が慎ましくも楽しげに触れている地平線を！
来たれ！そして、幾重ものヴェールを通して地上に
　光を落とす
恥ずかし気な星たちの眼差し、
薫りと歌がしみこんだ木、
畑の中の真昼の燃える息吹、
そして、影、太陽、波、緑が、
そして自然の輝きが、
二つの花のように
きみの額には美を、きみの心には愛を花咲かせるように。

ヴィクトル・ユゴー「五月」（金原礼子『フォーレの歌曲とフランス近代の詩人たち』藤原書店、2002 年、34 頁）

ヴィクトル・ユゴー

9

## 8.「身代金」
## « La Rançon »

詩：シャルル・ボードレール　　作曲：ガブリエル・フォーレ
Charles Baudelaire　　Gabriel Fauré

演奏：竹内 公一（テノール）
水戸 博道（ピアノ）

1871 年ごろに作曲され、アンリ・デュパルク夫人に献呈された。シャルル・ボードレール（1821-1867）の原作は「マタイによる福音書」で自分の命を多くの人の「身代金」として捧げるようキリスト説いた一節をもとにした、寓意的な詩である。

L'homme à, pour payer sa rançon,
Deux champs au tuf profond et riche,
Qu'il faut qu'il remue et défriche
Avec le fer de la raison ;

Pour obtenir la moindre rose,
Pour extorquer quelques épis,
Des pleurs salés de son front gris
Sans cesse il faut qu'il les arrose.

L'un est l'Art, et l'autre l'Amour.
– Pour rendre le juge propice,
Lorsque de la stricte justice
Paraîtra le terrible jour,

Il faudra lui montrer des granges
Pleines de moisson, et des fleurs
Dont les formes et les couleurs
Gagnent le suffrage des Anges.

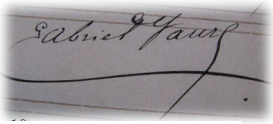
人間は、自分の身代金を払うために、
深く豊かな土壌の、二つの畑をもち、
それを、理性の鋤（すき）を用いて、
掘り返し開墾しなくてはならぬ。

ほんの小さな薔薇一本得るためにも、
数本の麦の穂をひねり出すためにも、
己が灰色の額の塩辛い涙で、
絶えずこれらの畑を潤さねばならぬ。

一つの畑は〈芸術〉、もう一つは〈愛〉。
―― 厳正な裁きの下される
恐ろしい日の到来する時、
裁く方（かた）を好意的ならしめんには、

お見せしなくてはなるまい、収穫（とりいれ）に
満ちた穀倉を、またその形も
その色も、〈天使〉たちの
賛同をかち得るような花々を。

シャルル・ボードレール「身代金」『ボードレール全詩集 I』阿部良雄訳、ちくま文庫、1998 年、355-356 頁



ガブリエル・フォーレ

## 9.「前世」
## « La Vie antérieure »

詩：シャルル・ボードレール　　作曲：アンリ・デュパルク
Charles Baudelaire　　Henri Duparc

演奏：竹内 公一（テノール）
水戸 博道（ピアノ）

セザール・フランクの弟子、アンリ・デュパルク（1848-1933）は、歌曲はわずか17曲を残しただけで作曲家としてのキャリアを終えている。「前世」(1884年）はその最後の作である。ボードレールの十四行詩「前世」は、詩人ジェラール・ド・ネルヴァル（1808−1855）の転生説的な考えのもと、若い頃の南方旅行の記憶の風景を詠んだものとされている。

J'ai longtemps habité sous de vastes portiques
Que les soleils marins teignaient de mille feux,
Et que leurs grands piliers, droits et majestueux,
Rendaient pareils, le soir, aux grottes basaltiques.

Les houles, en roulant les images des cieux
Mêlaient d'une façon solennelle et mystique
Les tout-puissants accords de leur riche musique
Aux couleurs du couchant reflété par mes yeux.

C'est là que j'ai vécu dans les voluptés calmes,
Au milieu de l'azur, des vagues, des splendeurs
Et des esclaves nus, tout imprégnés d'odeurs,

Qui me rafraîchissaient le front avec des palmes,
Et dont l'unique soin était d'approfondir
Le secret douloureux qui me faisait languir.

ひろびろとした柱廊の下(もと)に、私は長く暮したのだ、
海の太陽が数知れぬ火に染めなすその柱廊の、
大きな列柱(はしら)はまっすぐに、堂々とそそり立って、
夕べには、まるで玄武岩の洞窟のようだった。

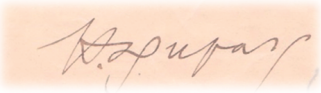
大波はうねり、天景を映してころがしながら、
彼らのゆたかな音楽の、世にも力強い和音を、
私の眼に照り映える落日の色と、
おごそかにも神秘に、混ぜ合わせていた。

彼処(かしこ)にこそ、おだやかな逸楽のうちに私は生きた、
青空と、海の波と、壮麗な光景のさなか、
香料を身にしみこませた、裸の奴隷たちにかこまれて。

棕櫚の葉で私の額に風をおくる奴隷たちの
懸念といっては、私を日に日にやつれさせる
いたましい秘密を、きわめることばかりだった。

シャルル・ボードレール「前世」『ボードレール全詩集 I』阿部良雄訳、ちくま文庫、1998年、55-56頁

アンリ・デュパルク



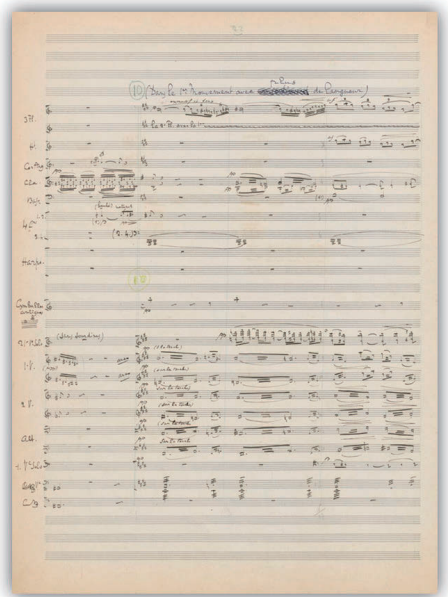
シャルル・ボードレール

## 10. 前奏曲集第 1 集　第 4 曲「音と香りは夕暮れの大気に漂う」
**4e Prélude (1er livre), « ... Les sons et les parfums tournent dans l'air du soir »**

作曲：クロード・ドビュッシー
Claude Debussy

演奏：水戸 博道（ピアノ）

1909-1910 年に作曲された『前奏曲集第 1 集』の第 4 曲。ボードレールの詩「夕暮れの諧調」から想を得て作曲された。詩の一節である「音と香りは夕暮れの大気に漂う」は、ドビュッシー自身により、聴き手や演奏者の想像力の邪魔をしないよう楽譜の末尾に（…Les sons et les parfums tournent dans l'air du soir）とひっそりと記され、静かな余韻を残している。



ドビュッシー作曲「牧神の午後」の手稿
Manuscrit autographe du *Prélude à l'après-midi d'un faune*

## 11. ピアノトリオ
## Trio pour piano, violon et violoncelle

作曲：ガブリエル・フォーレ
Gabriel Fauré

演奏：平尾 真伸（ヴァイオリン）
丹羽 経彦（チェロ）
関田 桂子（ピアノ）

フォーレの最晩年にあたる 1922 年から 23 年、衰えゆく肉体や気力、特に悪化しつつあった聴覚障害と闘いながら作曲された。曲は 3 つの楽章からなり、山と湖の間に位置する保養地、アヌシー＝ル＝ヴューで書き進められた第 2 楽章には、あたかも音楽が時を刻んでいるかのような、フォーレの最も純粋な音楽のひらめきが示されている。

第 1 楽章：Allegro non troppo
第 2 楽章：Andantino
第 3 楽章：Allegro vivo

晩年のガブリエル・フォーレ

## 出演者プロフィール

### 平尾 真伸（ヴァイオリン）

昭和 32 年京都市立堀川高校音楽コース入学。34 年東京芸術大学音楽学部入学。芸大在学中に都響に研究員で入団。37 年読売日本交響楽団入団。都響退団後、神奈川フィルコンサートマスターを歴任。再び東京都交響楽団に入団。ニューアーツ弦楽四重奏団。平成 16 年都響定年退職し全国のオーケストラに招かれ、現在に至る。尾島綾子、香西理子、鬼束龍夫、小林武史に師事（敬称略）。

### 丹羽 経彦（チェロ）

1958 年大阪音楽大学付属高等学校入学、チェロの手ほどきを受ける。大阪音楽大学を経て、1965 年桐朋学園音楽部入学、1970 年 読売日本交響楽団入団、1976 年 NHK 交響楽団入団、2003 年 NHK 交響楽団定年退職、故伊達三郎、斉藤秀雄両氏に師事。

### 鈴木 愛美（ソプラノ）

国立音楽大学卒業、同大学院及び新国立劇場オペラ研修所修了。文化庁在外研修員としてミラノ留学、ローム・ミュージックファンデーションの助成にて、ウィーン国立音楽大学院を最優秀成績で修了。飯塚新人音楽コンクール大賞、文部科学大臣賞、朝日新聞社賞。シェーンブルン宮殿劇場オペラ、飯守泰次郎指揮「天地創造」、パスカルヴェロ指揮「フォーレ レクイエム」ソロ等、オペラやコンサート等で活躍。新潟大学音楽科専任講師。二期会会員。

### 竹内 公一（テノール）

新潟市出身。東京芸術大学に学ぶ。98 年より 10 年間、びわ湖ホール専属声楽アンサンブル歌手として活動。新国立劇場、二期会などの多数のオペラに出演し世界的な指揮者、演出家と共演している。第九やオラトリオのソリストとして、また歌曲の演奏会などでも出演が多い。指揮者としての活動も多く、各地のオーケストラ、吹奏楽団、合唱団などの指導、指揮を務め、特に声楽作品において多岐にわたる作品に精通している。

水戸 博道（ピアノ）

武蔵野音楽大学卒業、ローハンプトン大学博士課程修了（PhD を取得）。広島、新潟、東京でリサイタル、サロンコンサートを多数開催。ピアノコンチェルトのソリストとして、マルコ・バルデリ氏、ヴォルフガング・ポデュシカ氏、下野竜也氏、松元宏康氏と共演。国際音楽教育会議、APSMER 環太平洋音楽教育シンポジウムの理事を歴任。また、Research Studies in Music Education 及び British Journal of Music Education 各誌の編集委員をつとめる。現在、明治学院大学心理学部教育発達学科教授。

関田 桂子（ピアノ）

東北大学文学部哲学科卒業。ピアノを関田和子、水戸博道氏らに師事。2007、2008 年ロワール国際アカデミー、2009 年ビアナ・ド・カステロミュージックフェスティバルに参加、ピアノと室内楽を学び現地での演奏会に出演。ピアノコンチェルトのソリストとして舘野英司氏と共演。室内楽の分野でも各地で活動している。

津森 圭一（レクチャー）

パリ第 3 大学博士課程修了。現在、新潟大学人文学部准教授。マルセル・プルーストを中心に、フランス近代文学が専門。

畠山 達（レクチャー）

パリ第 4 大学博士課程修了。現在、明治学院大学文学部准教授。ボードレールを中心としたフランス近代詩と美術批評、およびフランス 19 世紀中等教育が専門。

♪ mémo ♪